

劉辰翁評との比較を通じた李賀詩王琦注の分析

奥野, 新太郎
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1650975>

出版情報 : 文學研究. 113, pp.11-36, 2016-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

劉辰翁評との比較を通じた李賀詩王琦注の分析

奥野 新太郎

一 はじめに

唐の詩人李賀（字は長吉、七九一～八一七）の詩には、歴代多くの注釈や批評が行われてきた。とりわけ清の王琦（一六九六～一七七四）による注釈本である『李長吉歌詩彙解』（以下『彙解』と略称）は、世界書局の中国文学名著『李賀詩注』（曾益『昌谷集』）と『三家評注李長吉歌詩』を併せたもの¹や、上海古籍出版社の中国古典文学叢書『三家評注李長吉歌詩』（姚文燮『昌谷集註』、方扶南『李長吉詩集批註』と併せて収録）に収録され、李賀詩の注釈のなかでも評価の高いものとして、現在最も広く通行している李賀詩の注釈の一つである。

本稿は、李賀詩の王琦注について、主にその解釈の方法論的特徴や王琦の解釈者としての立場について分析を試みる。その際、劉辰翁（字は会孟、号は須溪、一二三二～一二九七）による李賀詩への評点を比較対象として取りあげる。両者を比較する理由は、彼らが解釈者としてタイプが違うことに加え、後述するように王琦注は明らかに劉辰翁評と反目する部分があるからである。同一作家に対する相反する解釈態度と比較することで、王琦

注と劉辰翁評と、それぞれの特徴をより浮き彫りにする。さらに、その分析を通じて、中国古典詩研究における「読み」に関する諸問題についても考察する。

二 注釈者王琦について

王琦の伝記については、程国賦・蒋晓光「清代王琦生平考証」⁽²⁾、宋紅霞「清代学者王琦的生平経歴及注釈学成就」⁽³⁾、孫易君「清人王琦家世及生平新考」⁽⁴⁾などによって考証されている。これら先行研究によりつつ、まず王琦の人物について紹介しておく。

王琦（一六九六—一七七四）、原名は士琦、字は載韓（一字に載庵）、号は琢崖、晩年には自ら胥山老人とも称した。浙東錢塘（現浙江杭州）の人である。注釈書に『李太白全集』『李長吉歌詩彙解』があるほか、趙殿成『王右丞集箋注』の作成を手伝ってもある。趙殿成は王琦の姉婿に当たる（民国十一年『杭州府志』卷一三四）。また文学に加えて医学にも造形が深く、医書として『周慎齋遺書』『医林指月』の編著がある。

注釈者としての王琦の評価は高く、現在の李白研究及び李賀研究において、王琦の注釈は解釈のための重要な先行研究として用いられている。その特徴について、例えば宋紅霞前掲論文は李白の注釈を取りあげて、歴代の李白評価における最大の論点の一つである李杜優劣論に対する王琦の「持論平正」⁽⁵⁾な態度を取りあげ、揚杜と揚李とどちらにも与しない公平な態度を高く評価する。またこの態度は先人の注についてその解釈の是非を判断する際にも発揮されており、王琦自身が注を付ける際の博覧傍証と併せて、清朝考拠学の成果を承けた優れて客観的な解釈態度であるとされる。李賀詩の注釈においてもやはり同様の評価を受けており、張紅麗「王琦《李長吉歌詩彙解》評議」⁽⁶⁾は李賀詩の王琦注の特徴を次のようにまとめている。

- (一) 先行する諸家の注釈を博搜してまとめ、その是非について慎重に考察している。
 - (二) 引用資料が極めて豊富かつ詳細である。
 - (三) 注釈の内容が、先行注釈よりも広範かつ周到である。
- このように張紅麗は王琦注を高く評価すると同時に、一方ではその不足についても次のようにまとめている。
- (一) 引用のみで説明しないときがある。
 - (二) 諸説を並記して判断しないときがある。
 - (三) 注を付けるべき箇所注していないときがある。
 - (四) 引用資料が不適當、或いは牽強附会なときがある。
 - (五) 重複する注を省略しており、閲覽に不便なときがある。
 - (六) 引用資料の出典を明示していないときがある。
 - (七) 字義を解説する際に、字音を解説しない。 *張紅麗はこれを王琦注の「一大缺憾」とする。
 - (八) 語句の解説で終わっており、そこから句意や詩全体の解釈や鑑賞まで到達しないときがある。
- なお張紅麗はこれらの不足点を「当時の学風の影響の致すところである」とし、当時の限界に鑑みた配慮を示しており、総じて王琦注に高い評価を与えている。王琦注がどのようなものであるかを紹介するならば、これら先行研究による整理で概ね尽きてしまうだろう。だが、彼の解釈に際する手法や態度そのものに着目すると、さらに様々な論点をその注釈のなかに見出すことができる。では、王琦注の解釈学的特徴とはどこにあるのだろうか。以下、具体的な例を挙げつつ考察を加えてみたい。なお、本稿は李賀詩そのものの解釈の問題には原則として立ち入らず、飽くまでも王琦がどのように李賀詩を理解し、解釈しているかという、その手法こそを問題とするものであることをあらかじめ断っておく。

三 李賀詩の王琦注について

① 劉辰翁評への反駁

分析に先立ち、以下の考察に深く関わるものとして、劉辰翁の評に対する王琦の批判の言を確認しておこう。先に述べたように、王琦は劉辰翁に対して批判的立場をとっている。それはまず何よりも、『彙解』⁽⁷⁾巻頭に収録されている杜牧の序文に付された王注に明言されている。

屢云、妙処不必可解。試問、作詩至不可解、妙在何処。觀古今才人嘆賞長吉諸詩、嘆賞其可解者乎、嘆賞其在理外者乎、抑嘆賞其不在理外者乎。予謂、須谿評語、疑誤後人正復不少。而自附于長吉之知己謬矣。宋潛溪嘗嘗劉氏評詩、如醉翁癡語、終不能了了。可謂知言。

(劉辰翁) 屢^{しばしば}ば云う、妙処必ずしも解すべからずと。試みに問う、詩を作りて解すべからざるに至れば、妙は何処に在りや。古今の才人の長吉の諸詩を嘆賞するを觀るに、其の解すべき者を嘆賞するか、其の理外に在る者を嘆賞するか、抑も其の理外に在らざる者を嘆賞するか。予^{おも}謂えらく、須谿の評語、疑うらくは後人を誤らしむること正に復た少なからざらん。而るに自ら長吉の知己に附するは謬^{あやま}りなり。宋潛溪(宋濂)嘗て劉氏の評詩を^{そし}りていう、醉翁の癡語^{ねごと}の如し、終に了^{あきら}かならしむる能わず、と。知言と謂うべし。

ここで王琦が「妙処必ずしも解すべからず」と言うのは、劉辰翁の評語にしばしば見える「不必可解」という語を指したものである。⁽⁸⁾また、この批判は次なる劉辰翁の言葉へも向けられている。

旧看長吉詩、因喜其才、亦厭其澁。落筆細誦、方知作者用心。料他人觀不到此也。是千年長吉猶無知己也。以杜牧之鄭重為叙、直取二三歌詩而止、始知牧亦未嘗讀也、即讀亦未知也。微一二歌詩、將無道長吉者矣。⁽⁹⁾

旧て長吉の詩を見るに、因りて其の才を喜むも、亦た其の洩たるを賦う。落筆細読するに、方めて作者の心を用いるを知る。料るに他人の観は此に到らざるなり。是れ千年長吉猶お知己無きがごとし。杜牧の鄭重に叙を為るも、直だ二三の歌詩を取りて止むを以て、始めて牧も亦た未だ嘗て読まず、即い読めども亦た未だ知らざるを知る。微か一二の歌詩もて、將た長吉を道う者無からんや。

劉辰翁は李賀の詩を読む際に、「落筆（圈点と評語を書き込むことを言うのであろう）⁽¹⁰⁾細読」するなかで、作者の「用心」を知ったと言う。そして、従来の人々による李賀詩の読みは自分ほどには至っておらず、自分こそが李賀詩にとつての初めての「知己」であると豪語する。かくも李賀詩の理解者を自認する劉辰翁にあつて、その彼が「不必可解」なる發言を以て、解釈できないことを容認することについて、王琦は理解に苦しんだのだろう。何故なら、王琦においては後述するように詩句の意味の理解こそが何よりも重んじるところであつたからである。なればこそ、「不必可解」などと開き直る劉辰翁の發言は看過できないものであつた。

② 李賀詩は解説可能である

李賀詩に注釈を施すにあたり、王琦の念頭には、「李賀詩は解説可能なテキストである」という信念が存在していると思ひしい。『彙解』王琦序に言う。

又樊川序中反覆称美、喻其佳处凡九則。後之解者、祇拾其「鯨呿鰲擲、牛鬼蛇神、虚荒誕幻」之一則、以為端緒、煩辞巧說、差爽尤多。余集所見諸家箋註、刪去浮蔓而録其確切者、間以鄙意辨析其間。有竟不可解者、多因字面訛舛、難可意揣、寧缺無鑿、期于不失原詩本来面目、勿令後之觀者、因箋釈之不明、而反墮冥冥雲霧中也。

又た樊川（杜牧）序中に反覆して称美し、其の佳処を喩うることに凡そ九則あり。後の解する者は、祇だ其の「鯨

蛙鰲擲、牛鬼蛇神、虚荒誕幻」の一則のみを拾いて、以て端緒と為し、煩辞巧説し、差爽尤も多し。余は見
る所の諸家の箋註を集め、浮蔓を刪去して其の確切たる者を録し、間ま鄙意を以て其の間に辨析す。竟に解
すべからざる者有るも、多く字画の訛舛に因れば、意もて揣るべきこと難く、寧ろ鑿つこと無きに缺くも、
原詩の本来の面目を失わざるを期し、後の観る者をして、箋釈の不明に因りて、反つて冥冥なる雲霧の中に
墮さしむる勿からんとす。

李賀詩は杜牧の序文に見える「鯨蛙鰲擲、牛鬼蛇神、虚荒誕幻」という評⁽¹⁾以来、その奇なる部分ばかりが取り
沙汰され、様々に評されてきたが、それらの多くは誤り（＝差爽）であると王琦は言う。王琦は李賀詩を注する
に際して、歴代の注を集め、その「浮蔓」を削り、信頼できる確かな解釈のみを採録したが、必要に応じてそこ
に私見を加えている。またどうしても理解できなかった部分については、詩の文字の誤りのせいであろうと言う。
ここには、李賀詩に対する従来の偏見を退け、理解可能なテクストとして注釈しようとする王琦の態度が窺える。
読めない箇所は原文が誤っているというのは、言い換えれば原文の誤字でも無い限り李賀詩は理解可能である
ということである。それは、^レ鬼才^ヲと呼ばれ、^レ奇^ヲを以て評され、その理解の困難さを強調され続けてきた李賀
詩の伝統的評価に対する王琦によるアンチテーゼとも言える。

では、その注釈は実際にいかなるものなのか。以下、例を挙げて見てみよう。例えば「李憑箏篋引」（卷二）
に次のようにある（以下、王琦注は紙幅の都合上、必要に応じて一部省略しつつ引用する。また注文の傍点は引用者による）。

吳糸蜀桐張高秋、空山凝雲頽不流。

江娥啼竹素女愁、李憑中国彈箏篋。

「糸」「桐」、詠其器。「高秋」、詠其時。「空山雲凝」、詠其景。「江娥啼竹素女愁」、詠其声能感人情志。
糸之精好者出自吳地、故曰「吳糸」。蜀中桐木宜為樂器、故曰「蜀桐」。『歲華紀麗』、九月曰高秋、亦曰

暮秋。『博物志』、舜之二妃曰湘夫人、舜崩、二妃以涕揮竹、竹尽斑。『史記』、太帝使素女鼓五十絃瑟、悲帝禁不止、乃破其瑟為二十五絃。

崑山玉碎鳳凰叫、芙蓉泣露香蘭笑。

「玉碎」、状其声之清脆。「鳳叫」、状其声之和緩。「蓉泣」、状其声之慘澹。「蘭笑」、状其声之冶麗。「韓詩外伝」、玉出於崑山。『楚辞章句』、芙蓉、蓮花也。劉勰『新論』、秋葉泣露如泣、春葩含日似笑。『文獻通考』、燕樂有大箏篥、小箏篥、音逐手起、曲随絃成。蓋若鶴鳴之嘹唳、玉声之清越者也。与此詩辭意略同。

十二門前融冷光、二十三糸動紫光。

上句言其声能變易氣候、即鄒衍吹律而温氣至之意。下句言其声能感動天神、即圜丘奏樂而天神皆降之意。『三輔黄圖』、長安城、面三門、四面十二門、皆通達九達以相經緯。沈約「郊居賦」、降紫皇於天闕。『太平御覽』、『秘要經』曰、太清九宮、皆有僚属、其最高者、称太皇。「紫皇」、玉皇。

女媧煉石補天処、石破天驚逗秋雨。

『淮南子』、女媧鍊五色石以補蒼天。吳正子註、言箏篥之声、忽如石破而秋雨逗下。猶白樂天「琵琶行」、銀瓶乍破漿迸之意。琦玩詩意、当是初彈之時、凝雲滿空、繼之而秋雨驟作、泊乎曲終声歇、則露氣已下、朗月在天、皆一時实景也。而自詩人言之、則以為凝雲滿空者、乃箏篥之声遏之而不流、秋雨驟至者、乃箏篥之声感之而旋応、似景似情、似虚似実。讀者徒賞其琢句之奇、解者又昧其用意之巧、顯然明白之辭、而反以為在可解不可解之間、誤矣。

夢入神山教神媧、老魚跳波瘦蛟舞。

言其声之精妙、雖幽若神鬼、頑若異類、亦能見賞。『搜神記』、永嘉中有神見兗州、自称樊道基。有媧号

成夫人、夫人好音楽、能弹箜篌、闻人絃歌、輒便起舞。所謂「神嫗」疑用此事。『列子』、瓠巴鼓琴而鳥舞魚躍、所謂「老魚跳波瘦蛟舞」、暗用此事。

吳質不眠倚桂樹、露脚斜飛湿寒兔。

言、賞音者聽而忘倦、至於露零月冷、夜景深沉、尚倚樹而不眠、其声之動人駭聽、為何如哉。吳質、三国時人。考『魏志』『魏略』中所載事跡、与音楽不相涉。劉義慶「箜篌賦」云、名啓端於雅引、器荷重於吳君。豈即用吳質事、而載籍失伝、今無可考証歟。「寒兔」謂秋月。

ここで王琦は第五聯の注に言う。

読者徒賞其琢句之奇、解者又昧其用意之巧、顯然明白之辞、而反以為在可解不可解之間、誤矣。

読む者はただ其の琢句の奇を賞するのみにして、解する者も又た其の用意の巧に昧くらければ、顯然として明白の辞も、反つて以て解すべきと解すべからずの間に在りと為すは、誤りなり。

「李憑箜篌引」は李賀詩集の巻頭の作品であり、そこに述べられるこの王琦の言には、李賀詩の注釈における彼のポリシーが表れている。李賀詩は従来の評者より難解の評を受け続けてきたが、王琦に言わせれば、それは飽くまでも解説可能なものなのである。然るに、従来の評者は李賀詩の表現上の「奇」の側面のみにとらわれ、そこばかりに注意を向け、また注釈者（＝解者）も李賀が詩中に意を表現する際の巧みさを理解する技倆が無いために、明らかに解説可能な詩句に対してすら、理解可能と理解不可能の境界にその妙を求めるなどということを行い出すのであるが、それは全くの誤りであると、王琦はここに明言する。先に見た劉辰翁への批判の言と併せると、この発言の裏には劉辰翁の評が少なからず意識されていると見てよいだろう。そして、李賀詩の王琦注は、この宣言を実行するかのごとく、執拗とも言えるほどに、詩句の解説に力を入れてゆく。¹²⁾この詩においても各語句聯について、右に引いたように或いは「詠」、或いは「状」、或いは「言」と、その「詩意」が詳細に説明

されている。

李賀詩の王琦注は、文献の引用もさることながら、このように王琦自身の言葉による解説が大量に含まれている。王琦は李賀詩の注釈にあたって、李賀詩の難解という伝統的な評価の超克を目標としているように見える。また、かかる態度で臨むからこそ、先に述べたように、「不必可解」と言う劉辰翁の発言が王琦には許せないのであろう。これは注釈者としては当然の態度であり、何ら特別なものではない。だが、かくも解説に拘るあまり、王琦の注釈には一部検討を要する解釈の手法が見られる。この部分について考察するのが本稿の目的である。

では、「李憑箏篋引」の中には解釈に関するいかなる問題が見出せるか。その前にまず注意しておかなければならないのは、王琦注における「テキストの意味」と「作者の意図」との区別である。注中で王琦が言う「詩意」とは、前者を指すものと考えられる。テキストの意味とは作品、テキストの言語が何を意味しているかということであり、作者がそのテキストを以て何を言おうとした（行おうとした）かという作者の意図とは区別されなければならぬ。王琦は両者について区別をしながら注釈作業を行っており、かつ彼の解釈の対象は、作者の意図ではなくテキストの意味にあったと考えられる。

③ 一時の実景であり、或いは叙事

このことについて注目されるのが、「李憑箏篋引」第五聯の注に見える「皆一時実景」という指摘である。詩中に錯綜する奇抜な語句を王琦は冷静に受け止め、これらは全て実際の情景の比喩に過ぎないと見る。そして、実景である以上、ここでは意図に対するさらなる詮索は不要となる。王琦の言う「詩意」とは飽くまでもテキストの意味であり、作者の意図ではない。王琦は詩中に描かれているものを「実景である」と結論づけることにより、テキストの意味（＝詩意）を説明する一方で、同時に作者の意図についての安易な詮索を回避しているの

ある。この「一時実景」に類する言葉を王琦注はしばしば用いている。ほかにもいくつか例を挙げてみよう。

例えば「浩歌」(巻一)では、

漏催水咽玉蟾蜍、衛娘髮薄不勝梳。看見秋眉換新緑、二十男兒那刺促。

「漏催水咽玉蟾蜍」、見光陰易過。「衛娘髮薄不勝梳」、見冶容易衰。「漏水」、必是飲酒筵側所設儀器。「衛娘」亦是奉觴之妓。皆拋一時所見者而言。末二句自言其志、不能受役于人也。

「漏催水咽玉蟾蜍」とは、光陰の過ぎ易きを見る。「衛娘髮薄不勝梳」とは、冶容の衰え易きを見る。「漏水」は、必ず是れ酒を飲む筵の側らに設くる所の儀器なり。「衛娘」も亦た是れ觴を奉ずるの妓なり。皆な一時に見る所の者に抛りて言うなり。末二句は自ら其の志を言う、人に役せらるるを受くる能わざるなり。

とあり、「漏催……」聯について、やはり「一時所見」を詠じていると解説する。「末二句……」云々は、一見すると作者の意図を読み取っているようにも見えが、飽くまでもテキストの言語が言わんとするところであり、やはりテキストの意味である。李賀詩に散見する奇抜な表現は、現代の読者においては、しばしばあたかも象徴詩のごとく、そこに込められた作者の深い真意を読み取ろうとする読みがなされることがある。このような一種の深読みは、読み手にとっては確かに魅惑的なものではあるが、それを「実景である」と断じる王琦はそこには踏み込まない。このように、詩中に何をどこまで読み取るかということにおけるバランス感覚は、我々が文学作品を読む上でも常に問題となるものである。作者の意図に拘泥する読み手であれば、可能な限り作品テキストの裏にそれを読み取ろうとするであろう。しかしそれは時に読み手の勝手なこじつけ(＝附会)に陥る危険性を免れない。なるほど、一方では「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」(『周易』繫辭伝上)とあるように、書＝書記言語とは根本的には作者の意より発したものであり、それゆえ読み手は書を通じて最終的には意にまで到達する

べきだとする読みの態度も根強く存在していることも事実である。この点において、王琦の「実景である」という解説は、このことに対する彼のバランス感覚を示す興味深い言葉として、その解釈学的な意義を注意されてよい。またこれは我々に対しても、解釈の態度について改めて考察を促す言でもあるだろう。

さらに「秦王飲酒」（卷二）では、詩を総括して、

秦王騎虎遊八極、劍光照空天自碧。羲和敲日玻璃声、劫灰飛尽古今平。

龍頭瀉酒邀酒星、金槽琵琶夜枵枵。洞庭雨脚来吹笙、酒酣喝月使倒行。銀雲櫛櫛瑤殿明。

宮門掌事報一更。花樓玉鳳声嬌啼、海綃紅文香浅清、黃鵝跳舞千年觥。

仙人燭樹鸚鵡輕、清琴醉眼淚泓泓。

題作「秦王飲酒」、而詩中無一語用秦国故事。旧註以為為始皇而作、非也。姚絰三以為為德宗而作、德宗性剛暴、好宴遊。常幸魚藻池、使宮人張水嬉。綵服雕靡、糸竹間發、飲酒為樂、故以秦王追誚之。琦按、德宗未為太子、嘗封雍王矣。雍州、正秦地也、故借秦王以為称、其說近是。而以為追誚則非也。……長吉極意抒写、聊以紀一時之事、未必有意譏誚、其說之不当過于侈張、乃是長吉不能少加以理使然。若句模字擬、深文曲解、以為誹議之詞、不惟失詩人之意、而附会穿鑿、章法段落俱無脈絡貫注于中、不免以文害辭、以辞害意矣。

題して「秦王飲酒」と為すも、詩中には一語として秦国の故事を用いる無し。旧註の以て始皇の為に作ると為すは、非なり。姚絰三（文燮）は以て德宗の為に作ると為す、德宗は性剛暴にして、宴遊を好む。常に魚藻池に幸して、宮人をして水を張らしめて嬉る。綵服雕靡にして、糸竹間に発し、飲酒して樂と為す、故に秦王を以て之れを追誚す、と。

琦按ずるに、德宗未だ太子為らざるとき、嘗て雍王に封ぜらる。雍州は、正に秦の地なり、故に秦王に

借りて以て称と為すは、其の説は是に近し。而れども以て追諂と為すは則ち非なり。……長吉は極だ抒写に意あり、聊か以て一時の事を紀すのみにして、未だ必ずしも譏諂に意有らず、其の説の不当にして侈張に過ぐるは、乃ち是れ長吉の少や加うるに理を以てする能わずして然らしむるなり。句に模し字に擬し、深文曲解し、以て誹議の詞と為すが若きは、惟だ詩人の意を失うのみならず、附会穿鑿して、章法段落俱に脈絡の中に貫注する無く、文を以て辞を害し、辞を以て意を害するを免れざるなり。

と述べている。ここには詩の読みに関する王琦の持論も述べられていて興味深い。李賀詩はその難解さゆえ、注家による様々な解釈が加えられてきた。例えばこの「秦王飲酒」では、詩中の「秦王」に誰を比定するかが議論されている。⁽¹³⁾王琦は従来の解釈として、この詩を始皇帝のことを詠んだとする説、唐徳宗のことを詠んだとする説を紹介している。それらはいずれも「秦王飲酒」に諷諫を読み取ろうとした解釈である。それに対して、王琦は自説としては徳宗説に与しながらも、「而るに以て追諂と為せば則ち非なり」とし、諷諫などの寓意は特に無いと解釈している。王琦注は、概して李賀詩の中に諷諭や寓意を読み取ることに對して慎重な態度を取っている。王琦の目的は、飽くまでもテキストの意味の解説にあり、そこからさらにいたずらに作者の意図にまで踏み込むことについては積極的ではないのである。

また「猛虎行」(卷四)に言つ。

長戈莫春、強弩莫抨。乳孫哺子、教得生獐。拳頭為城、掉尾為旌。東海黃公、愁見夜行。

道逢騶虞、牛哀不平。何用尺刀、壁上雷鳴。泰山之下、婦人哭声。

「檀弓」、孔子過泰山側、有婦人哭于墓者而哀。夫人式而聽之、使子路問之曰、子之哭也、一似重有憂者。

而曰、然。昔者吾舅死于虎、吾夫又死焉。今吾子又死焉。夫子曰、何為不去也。曰、無苛政。夫子曰、

小子識之、苛政猛于虎也。長吉用此、不過言虎之傷人累累、与苛政絶不相干、而旧註多云為譏猛政而作

者、非是。

「壇弓」、(省略) 長吉此れを用いるも、虎の人を傷つること累累たるを言うに過ぎず、苛政とは絶えて相干せず、而して旧註に猛政を譏りて作ると為すと云う者の多きは、是に非ず。

官家有程、吏不敢聽。

劉須溪註云、吏畏嚴刑、犯險穿虎而行。是謂不敢聽婦人之哭声也。邱季貞註云、官家雖有程命捕虎、而吏不敢聽者、懼又傷于虎、是謂不敢聽官司之期限也。二說皆可、而邱註似優。

劉須溪註に云う、吏嚴刑を畏れ、險を犯し虎を穿ちて行く、と。是れ敢えて婦人の哭声を聴かざるを謂うなり。邱季貞(象隨)註に云う、官家は程命有りて虎を捕うると雖も、吏敢えて聴かざるは、又た虎に傷つけらるるを懼ればなり、是れ敢えて官司の期限を聴かざるを謂うなり、と。二說皆な可なるも、邱註優れたるに似る。

王琦注はこの詩について、表現としてはいわゆる「苛政猛虎」の故事を下敷きに行っていることを指摘しつつも、李賀は飽くまでも虎の獍猛さを述べているのであって、詩そのものは苛政とは関係なく、政治を批判した作品ではないとする。尾聯の解釈について、邱註をより優れるとするのも、苛政猛虎の故事に寄せないための判断であろう。このように、王琦は李賀詩を实景であり、叙事であるとして、そこから諷刺などの作者の意図にまで踏み込もうとはしない。

だがかかる王琦の手法は時に検討を要する場合もある。例えば「河南府試十二月樂詞并閏月」の「三月」(卷一)の第二聯に次のようにある。

複宮深殿竹風起、新翠舞衿淨如水。

「新翠舞衿」、即翠色舞衫也。須谿以為竹者、非是。

「新翠舞衿」は、即ち翠色の舞衫なり。須谿の以て竹と為すは、是に非ず。

「新翠…」句について、王琦は文字通りの意味に理解し、これを竹の比喩と見る劉辰翁の解釈を否定する（劉辰翁はこの句を「皆な衆人の嘗て識る所に非ず、竹を謂うなり（皆非衆人所嘗識、謂竹也）」と評する）。王琦は李賀詩を解釈するに際して、①まず文字通りに理解して差し支えなければその通りに理解し、②それがうまくいかない時には比喩として理解する、という順番で解釈していると考えられ、「三月」のこの聯は①で解釈している。だがこの句は、例えばわが国の解者が或いは「竹の」新しい葉のみどりが美女のえりのように揺れ舞うて」と解し、或いは「呉正子は、竹の形容とし、王琦は、舞姫の衿と見るが、二つのイメージが重なっている。これも賀の詩の特色で、重なり合った意味が感覚上の違和を呼ぶか否かが表現の成否の分れ目だ」と解する¹⁵ように、竹の様子¹⁴の比喩とする読み方も必ずしも否定されるべきものではない。だが王琦はこれを「非是」と断ずる。王琦のように字義通りの意味に解する読み方は、そこに固執してしまうと、却って詩の解釈の幅を不要に狭めてしまう危険性をはらんでいるのである。

④あり得べき典故や本事、伝記の想像

中国古典詩を読み解くためには、作品中に用いられている典故等に習熟している必要がある。古典詩の難解さや、作者における表現の無限の可能性は、ひとえにこの典故という技法にあると言っても過言ではない。そして、典故が典故として機能するためには、当然ながら作者と読者がその典故を共有する必要がある。それゆえ、注釈の主な役割もその典故の指摘にあるのだが、詩中の語句の出典を求める際には、どうしても詮索不可能な場合が存在する。その際、王琦はそれでも何か基づくものがあるはずだと、あり得べき典故を想像することがしばしばある。

例えば「秋来」（卷二）に次のようにある。

桐風驚心壯士苦、衰灯絡緯啼寒素。誰看青簡一編書、不遣花虫粉空蠹。

思牽今夜腸応直、雨冷香魂弔書客。秋墳鬼唱鮑家詩、恨血千年土中碧。

「鬼唱鮑家詩」、或古有其事、唐宋以後失伝。

「鬼唱鮑家詩」とは、或いは古に其の事有り、唐宋以後は失伝するならん。

この詩の尾聯の「鮑家詩」とは鮑照の「代蒿里行」「代挽歌」などの詩を指すものとして解釈されることが多いが、王琦は敢えてその説には触れず、現在は伝わっていないが、きっとなにか典故があつたのだらうと、あり得べき典故の存在を想像している。王琦は「鮑家」＝鮑照という安易な比定を避けながらも、しかし必ずこの句は理解可能なものであるとして、苦肉の策として、そこに自分の知らない（確認し得ない）典故の存在を想定するのである。

さらに「李夫人」（卷二）でも、

紫皇宮殿重重開、夫人飛入瓊瑤台。緑香繡帳何時歇、青青無光宮水咽。

翻聯桂花墜秋月、孤鸞驚啼商糸笳。紅壁闌珊懸佩璫、歌台小妓遙相望。

玉蟾滴水雞人唱、露華蘭葉參差光。

按此詩必是當時有寵幸宮嬪亡没、帝思念而悲之、長吉將賦其事、而借漢武帝之李夫人以為題也。觀詩中並不用『漢書』李夫人傳中一事、可見與「秦王飲酒」一章指意相同。

按ずるに此の詩は必ず是れ當時寵幸せらるる宮嬪の亡没し、帝思念して之れを悲しむ有り、長吉將に其の事を賦さんとし、而して漢武帝の李夫人に借りて以て題と為すなり。詩中に並びに『漢書』李夫人傳中の一事も用いざるを觀るに、「秦王飲酒」一章の指意と相同じたるを見るべし。

と述べ、詩題から漢武帝と李夫人の故事に題材を採ったと思われるこの詩について、李夫人の物語が詠われていないことに疑問を呈しつつ、しかしこれは決して李賀の創作や想像ではなく、当時実際に李夫人のように亡くなった皇帝の寵姫がおり、そのことを詠じた作品であろうとして解釈する。「李夫人」と題しながら李夫人の物語を詠まないこの作品を、あり得べき本事の比喩と見なすことで理解しているのである。

また、「南園十三首」其十二（卷一）を見てみよう。

松溪黒水新竜卵、桂洞生硝旧馬牙。誰遣虞卿裁道帔、輕綃一疋染朝霞。

『史記』称虞卿、游説之士也。……与長吉生平無一相似、無庸取以自比、且与全首文意亦了不相干、何以忽入此古人姓名。意者昌谷中人有潜光隱曜、道服而幽居者、与長吉往来交好、其人虞姓、故以「虞卿」比之。如称賈至為賈生、孟浩然為孟夫子、唐人詩中類多有之。

『史記』に虞卿と称するは、游説の士なり。……長吉の生平と一も相似たる無し、取りて以て自ら比するを庸もちいる無し、且つ全首の文意とも亦た了つひに相干せず、何を以て忽ちに此の古人の姓名を入るるか。意おもうに昌谷中の人に潜光隱曜し、道服して幽居する者有り、長吉と往来交好し、其の人虞姓なれば、故に「虞卿」を以て之れに比す。賈至を称して賈生と為し、孟浩然を孟夫子と為すが如く、唐人の詩中には類おほひね多く之れ有り。

この詩に出てくる「虞卿」について、王琦はまず『史記』に見える戦国時代の虞卿という人物を挙げ、かつこの虞卿は李賀の生涯とも、或いはこの詩全篇とも何ら関わりは無く、なぜここに突然古人の名を出すのかと疑問を提示する。そして、この「虞卿」は実際には古人ではなく、李賀と仲のよい道士に虞姓の者がおり、その人を指しているのだろうと言う。これも何らかの資料に基づいた考証ではなく、詩中の語が自身の知りうる範囲の典故では理解しがたいがゆえに、あり得べき典故や本事を想像したものである。

同じく先に見た「浩歌」では、第五・六聯について次のように見える。

不須浪飲丁都護、世上英雄本無主。買糸繡作平原君、有酒唯澆趙州土。

丁都護、旧註指劉宋時之都護丁旡。又謂歌樂府中「丁都護」之曲而侑觴。琦按、唐時辺州設都護府、掌撫慰諸蕃、輯寧外寇、覘候奸譎、征討携貳。大都護從二品、副大都護從三品、上都護正三品、副都護從四品、丁都護當是丁姓而曾為都護府之官屬、或是武官而加銜都護者、与長吉同会、縦飲慷慨、有不遇知己之嘆、故以其官称之、告之以不須浪飲。

丁都護、旧註は劉宋の時の都護丁旡を指す。又た謂う樂府中の「丁都護」の曲を歌いて觴を侑すすむと。琦按ずるに、唐時辺州に都護府を設け、諸蕃を撫慰し、外寇を輯寧し、奸譎を覘候し、携貳を征討するを掌る。大都護は從二品、副大都護は從三品、上都護は正三品、副都護は從四品、丁都護は當に是れ丁姓にして曾て都護府の官屬と為りしものなるべし、或いは是れ武官にして都護を加銜する者にして、長吉と同会し、縦飲慷慨し、知己に遇わざるの嘆有り、故に其の官を以て之れを称し、之れに告ぐるに浪飲を須いずを以てするなり。

「丁都護」という詩中の語について、旧注が或いは劉宋の人物を指すと言ひ、また或いは樂府題を指すと言うのに対し、王琦は李賀の知り合いに丁という姓の都護がいたのであらうとし、それらの解釈を退けている。

このように、あり得べき典故や本事を想像するのは、李賀詩は理解可能なテキストであり、一見すると不可解な表現も、必ずその基づく典故や本事があり、それがわからないからこそ読みにくいだけなのだとする王琦の解釈態度によるものであらう。

同様の処理は、李賀の伝記に対しても行われている。李賀の伝記に関する資料は少ない。まとまった伝記と云えるのは新旧唐書に立てられたわずかな伝と李商隱「李賀小伝」のみであり、あとは雜書に断片的に見える細か

いエピソードと李賀詩自身から得られる情報しかない。ゆえに、彼の伝記については判然としない部分が多い。例えば李賀は「諱事件」によって科挙受験を阻まれ、しかし一応の官職には就いていたものの、その官職が奉礼郎なのか協律郎なのか、資料間に齟齬があり、ついに確定されていない。中国古典詩は「詩史」と称された杜詩の例を挙げるまでもなく、一般にその作品内容は作者本人の生活や人生に関連するものとされ、ゆえに作者自身の伝記情報を詩の解釈の根拠や資料として用いることが多い。これは現代のみならず、古来より伝統的に用いられてきた解釈手法である。或いは逆に、作品内容に基づいて作者の伝記が作られることも多く行われている。いずれにせよ、中国古典詩の解釈には、作者の伝記が重要な情報として位置付けられている。王琦が李賀詩を解釈する際にも、しばしば李賀の伝記を用い、或いは言及することが少なくない。例えば「上雲楽」（巻四）に言う。

飛香走紅滿天春、花竜盤盤上紫雲。三千宮女列金屋、五十絃瑟海上聞。

天江碎碎銀沙路、嬴女機中斷烟素。縫舞衣、八月一日君前舞。

……長吉職隸太常、故得与聞其事而賦之如此。苟欲援古事以証、其失之也遠矣。

援いて以て証せんと欲すれば、其れ之れを失すること也た遠し。……長吉は職として太常に隸す、故に其の事に与り聞くを得て之れを賦すこと此くの如し。苟し古事を

ここでは、李賀が太常寺に勤務していたという伝記情報を用いて、詩に詠じられているのは李賀が職務を通じて見聞きしたものであるとし、いたずらに古事を用いて解釈することを批判している。加えてここには先に検討した「一時実景」も関連している点も注意してよい。

また「詠懷二首」其二（巻一）では次のように見える。

日夕著書罷、驚霜落素糸。鏡中聊自笑、詎是南山期。頭上無幅巾、苦蘗已染衣。不見清溪魚、飲水得相宜。

長吉毎日騎驢出遊、偶有所得、即書投錦囊中、及暮帰、足成之、所謂「日夕著書」是其事也。其母見所書多、

輒曰、是兒要当嘔出心乃已爾。其苦吟若是、故方年少而已見白髮、自笑用心過勞、非養生以致壽考之道、当知自悔。科頭野服、隨意自適、如清溪之魚、飲水從容、乃得相宜、何為役役而槁死于文字之間乎。

長吉毎日驢に騎りて出遊し、偶たま得る所有れば、即ち書して錦囊の中に投じ、暮れに帰るに及びて、足して之れを成す、所謂「日夕著書」とは是れ其の事なり。其の母書する所の多きを見て、輒ち曰く、是の兒かな要ず当に心を嘔出して乃ち已むのみ、と。其の苦吟することはくの若し、故に方に年少にして已に白髮を見、自ら心を用いて甚だつか勞るるを笑う。養生して以て壽考を致すの道に非ず、当に自ら悔ゆるを知るべし。科頭野服して、意に随いて自適なるは、清溪の魚の、水を飲みて從容たるが如く、乃ち相宜しきを得れば、何為れぞ役役として文字の間に槁死せんや。

ここで王琦は詩意を解説しているが、そこに述べられる「長吉每旦……嘔出心乃已爾」とは、李商隱「李賀小伝」に見えるエピソードである。この詩を読み解くに際して、王琦は李賀の伝記に述べられる事柄と照合させつつ解釈を行っている。王琦の解釈は一見すると特に問題は無いように見えるが、しかしこの詩は必ずしも「李賀小伝」と対照させずとも解釈することは可能である。にも関わらず王琦が「李賀小伝」を引くのは、李賀詩を読むに際して可能な限りその伝記と照合させて読もうとする彼の解釈態度の現れと見るべきであろう。これは先に見た、あり得べき典故や本事を想像してまで詩が依拠した事実を詩中に求めようとする態度と通底するものである。王琦にとって李賀詩は理解可能なテキストであり、それは詩がいたずらに奇なる表現を敷き陳べたものではなく、確かな典故や本事に裏付けされた表現であることに支えられていなければならない。だからこそ、伝記に對してもこのように積極的に詩の解釈と関連付けようとするのである。

そして、かかる態度は結果として一先の典故や本事と同様に一伝記資料に裏付けがとれないことについてもあり得べき伝記事項を詩句から想像するということを許すこととなる。例えば「始為奉礼憶昌谷山居」（卷一）に

次のようにある。

掃廝馬蹄痕、衙回自閉門。長鎗江米熟、小樹棗花春。向壁懸如意、当簾閱角巾。犬書曾去洛、鶴病悔遊秦。

家在東洛、雖書信不廢、而遊宦西秦、不能無悔。『芸文類聚』、『述異記』曰、陸機少時頗好獵、在吳、豪客獻快犬名曰黃耳。……「古詩」、飛來及白鶴、乃從西北方。十五五、羅列成行。妻卒被病、不能相隨。五里一反顧、六里一徘徊。吾欲啣汝去、口噤不能開。吾欲負汝去、毛羽自摧頽。詩用此事、当因其婦臥病故与。

家は東洛に在り、書信廢さずと雖も、西秦に遊宦して、悔ゆる無かる能わず。『芸文類聚』（省略）、「古詩」（省略）、詩に此の事を用いるは、当に其の婦つまの病に臥すが故に因るべきか。

土甌封茶葉、山杯鎖竹根。不如船上月、誰棹滿溪雲。

この詩の第四聯は、「犬書……」句には陸機の故事、「鶴病……」句には古詩の「艷歌何嘗行」を典故として指摘することができ、王琦も注釈でこれらを引用する。そして王琦はさらに「詩用此事、当因其婦臥病故与」と、李賀がこの句を作った理由を、李賀の妻が実際に病に伏していたからだろうと推測している。李賀に妻がいたか否かについては、明確な資料は残っておらず、判然としない。にもかかわらず、王琦はこの詩句を解釈するに際して、李賀の妻が病に伏していたという伝記情報を想像し、それを以て理解している。無論、作品は作者の伝記を伝える重要な資料の一つであるから、王琦のように作品を根拠にその伝記を構築することは、別段奇異なものとして受け止められない。王琦のこの説は、例えば葉葱奇など現代の注釈者にも支持されている。¹⁸⁾だがこの手法は加減を誤ると、作品を根拠に自由に作者の伝記を創造することにも繋がってゆく危険性ははらむことは言うまでも無い。にもかかわらずこの解釈手法が中国古典詩の読みにおいて少なからず行われ続けているのは、中国古典詩とは、原則として（樂府題や詠史詩などを除いて）ノンフィクションであるという暗黙の前提の支えによるもの

であろう。しかし、その前提は果たしてどこまで妥当性を有するものなのであろうか。

⑤過度の訓詁主義への警戒

このように、李賀詩の語句を理解可能なものとして徹底的に解説してみせる王琦だが、一方では、行き過ぎた訓詁主義への警戒も指摘する。「愼公」(巻二)の末尾に注して言う。

琦按、董氏註以為紀夢之作、蓋縁結語而附會之。姚仙期中諸註悉從其說、殊失賀意。吳氏所云、可云超乎諸說之上者也。然細讀本文、有重複處、又有難解處、當是取一時譁浪笑傲之詞、歛娛遊戲之事、相雜而言。讀者略其文、通其意、可也。若句句積之、字字訓之、難乎其說矣。

琦按ずるに、董氏註は以て夢を紀すの作と為す、蓋し結語に縁りて之れを附會するなり。姚仙期(侄)本中の諸註は悉く其の説に従い、殊に賀の意を失う。吳氏(炎牧)の云う所、諸説の上に超たる者と云うべし。然れども本文を細読すれば、重複する処有り、又た難解なる処も有り、当に是れ一時の譁浪笑傲の詞、歛娛遊戲の事を取りて、相い雜えて言うべし。読む者は其の文を略して其の意に通ずれば可なり。若し句句に之れを積し、字字に之れを訓ずれば、其の説を難くするなり。

「愼公」の解釈について、王琦は先人の説を紹介し、判断を加えつつ、続けて言う。一句一句、或いは一字一字の詳細な訓詁に拘泥しては、作品の理解を困難なものにしてしまう、と。これは先に検討してきた王琦の解釈態度と一見矛盾するようにも思われるが、しかし、王琦は李賀詩の語句を詳細に解説する一方で、決して注釈の目的をそこには置いておらず、その最終的な目的は飽くまでも詩意の理解にあつたことを踏まえれば、両者にさほど矛盾はない。詩意を損ないかねないほどの訓詁への執着は、王琦にとり批判すべきものなのである。それがかつて自身の注釈を「釈事忘意」と批判した王琦の反省が反映されたものとも言えるだろう。

四 劉辰翁評点との比較

これまでの考察をまとめると、李賀詩王琦注には、李賀詩を理解可能なテキストとして解釈し、そして作者の意図ではなくテキストの意味（＝詩意）を追求するという特徴が指摘できる。そしてその理解可能性を求める過程で、必ずしも文献的根拠を持たないあり得べき典故や本事、伝記を想定するという解釈上の操作もそこには見られた。

では、かかる王琦注の解釈学的特徴を劉辰翁評と比較したとき、そこにいかなる解釈学的な論点が見出せるであろうか。最後にこのことについて考えてみたい。

筆者はかつて劉辰翁の評点について論じた際、劉辰翁評の読みの特徴として、情の重視や作者との同化などを指摘した。⁽¹⁹⁾それらは中国の注釈の主要な方法論である実証主義への批判として位置付けることができる。そして同時に、王琦注と最も対照的な部分でもある。王琦はテキストの意味を重視し、作者の意図に対しては終始慎重な態度をとる。これはつまり、自分自身を作品の外に置き、作者自身の主観性を追求することはしないということとを意味する。一方、情の感得を重視する劉辰翁は、解釈の際に作者自身や作中人物の主観性へと自身の主観を没入することを避けない。それゆえ、没入の果てに、そこに作者や作中人物の情を感得することができれば、些末な訓詁については「必ずしも解すべからず」という発言がなされるのである。例えば先に見た「秋来」について、劉辰翁は、

桐風驚心壯士苦、衰灯絡緯啼寒素。誰看青簡一編書、不遣花虫粉空蠹。

思牽今夜腸底直、雨冷香魂弔書客。秋墳鬼唱鮑家詩、恨血千年土中碧。

非長吉自挽耶。只秋夜読書自弔、其苦何。其險語至此、然無一字不合。

長吉の自ら挽^{よむ}うに非ざるか。只だ秋夜に書を読み自ら申う、其の苦しみや何ぞや。其れ陰語此に至る、然れども一字として合わざる無し。

と云う。「長吉自挽」とは、この詩を作ったときの李賀本人の心情にほかならない。劉辰翁は詩のなかにひたすら作者李賀の「苦」を見る。そして、それを感得すると、詩中の「陰語」は何ら奇なるものではなくなる。何故なら、李賀の「苦」を読み手である劉辰翁に伝えてあるからである。ここでは例えば「香魂」とは何なのか、「鮑家」が誰なのか、などの問題はもはや問題にはならない。自分で自分を申う作者の「苦」こそが、ここでは劉辰翁の読みの対象となっている。

一方、王琦は詩意こそ説明するものの、そこから作者である李賀本人の感情へと迫ることはしない。

苦心作書、思以伝後、奈無人觀賞、徒飽蠹魚之腹。如此即令嘔心鏤骨、章鍛句鍊、亦有何益。思念至此、腸之曲者亦幾牽而直矣。不知幽風冷雨之中、乃有香魂愍弔作書之客。若秋墳之鬼、有唱鮑家詩者。我知其恨血入土、必不泯滅、歷千年之久、而化為碧玉者矣。鬼唱鮑家詩、或古有其事、唐宋以後失伝。

苦心して書を作り、以て後に伝えんことを思うも、人の觀賞する無く、徒だ蠹魚の腹を飽かしむるのみなるを奈^{いかん}せん。此くの如ければ即^た令い嘔心鏤骨、章鍛句鍊すれども、亦た何の益ぞ有らん。思念して此に至るに、腸の曲がれる者も亦た幾ど牽かれて直なり。知らず幽風冷雨の中、乃ち香魂の作書の客を愍弔する有るを。秋墳の鬼の若きは、鮑家の詩を唱う者有り。我知る其の恨血は土に入り、必ず泯滅せず、千年の久しきを歴て、化して碧玉と為る者なるを。(後略)

両者を比較したとき―注釈と評点という形式にかかる違いを考慮したとしても―王琦の注釈は主観を介在させない客観的な解釈で、一方劉辰翁の評は主観的な印象であり、感想であると、我々の目には映るだろう。そして、研究の場においては、恐らく王琦の手法の方がより多く是とされるものと思われる。だが、果たしてそれで片付

けてしまつてよいだろうか。

両者の読みの違いには、解釈における「適用 Anwendung」や「作用 Wirkung」の問題を見出すことができよう。テキストの意味の解説に終始し、解釈主体である自身をテキストの外に置き、作者の意図の詮索―それは往々にして自身の主観を作品に没入させることを必要とする―に終始慎重な態度をとり続ける王琦は、作品の解釈主体に対する「適用」を回避する。少なくとも解釈の場において、王琦は李賀詩に「感動」はしない。一方、詩を自身に適用し、解釈主体の主観を作品中に没入させ、そこに共感或いは感得可能な情を読み取る劉辰翁は、「感動」する。解釈主体と作品テキストの関係は、解釈を行う上で重要な問題である。王琦と劉辰翁の読みの態度の違いは、いわゆる客観的と主観的との違いにとどまらず、解釈の場において解釈主体と作品テキストをどのような関係に置くのか、解釈主体に対する作品の適用についてどのように対処するのか、そしてそれらの違いによって、同じ作品の読み方によつてどのような違いが生じ得るのか、などの解釈学的に興味深い問題を我々に提示しているのである。

五 おわりに

王琦と劉辰翁の解釈における違いは、飽くまでも違いであり、その是非を論じるべき問題ではない。読みとは多様なものであるべきで、作品の解釈には様々な立場や態度、手法があつて然るべきである。然るに、中国古典文学研究においては、同じ作品に対する解釈の違いこそしばしば議論されるとは言え、それと比較して、解釈の手法や態度の違いについての議論はさほど盛んではないように見受けられる。そして、我々が李賀詩を読む際には、劉辰翁評よりも王琦注の方を頼りにする方が多いであろう。それは、出典や用例を用いた語義の確定に基づく我々の読みの方法と王琦のそれが合致することに由来する。その際、主観的な印象批評と称される劉辰翁評は、

我々の読みの参考資料として用いられることは少ない。だがこのことは、我々自身の解釈の手法の固定化を示してはいないだろうか。王琦と劉辰翁の解釈の手法の違いから何を学び、我々自身の解釈の手法にどのように反映させることができるか。文学研究の根幹に関わる要素として、解釈の手法の問題は今後も考察を続けていかなければならない。

本稿では王琦注についてごく一部の論点を考察することしかできなかったが、例えば古典を解釈する際の「歴史意識 *historisches Bewusstsein*」の問題や、語句の訓詁における解釈学的循環の問題など、王琦注を題材に議論することのできる問題はまだまだ多く残されている。これらについては今後の課題としたい。

注

- (1) 李賀詩への劉辰翁評点については拙稿「劉辰翁の評点と「情」」(『日本中国学会報』六二(二〇一〇年))を参照。
- (2) 『文学遺産』二〇〇八年第五期。
- (3) 『聯城大学学報(社会科学版)』二〇一三年第二期。
- (4) 『文献』二〇一四年三月第二期。
- (5) 齊召南「李太白集輯註序」(『李太白全集』(中国古典文学基本叢書、中華書局、一九七七年)下冊、一六八二頁)に見える語。
- (6) 『陝西師範大学学報(哲学社会科学版)』二〇〇七年七月第三六卷。
- (7) 以下、李賀詩の本文及び王琦注の引用は、『三家評注李長吉歌詩』(中国古典文学叢書、上海古籍出版社、一九九八年)所収『彙解』による。
- (8) 劉辰翁の李賀詩評に見える「不必可解」については、前掲拙稿を参照。
- (9) 以下、劉辰翁の評語は昌平坂学問所刊官板『吳正子箋注劉辰翁評点李長吉歌詩』(『和刻本漢詩集成』唐詩第五輯所収)による。
- (10) 劉辰翁の息子劉將孫は「刻長吉詩序」(『劉將孫集』卷九)に「尚恨書本白地狹、傍注不介意」と述べ、劉辰翁が評点の際に対象テキストの余白に直接書き込みをしていたことを記している。蓋し、書き込みをしながら精読(＝細読)するのが劉辰翁の読書スタイルであった。

- (11) 杜牧序文に李賀詩を評して「雲煙綿聯、不足為其態也。水之迢迢、不足為其情也。春之盜盜、不足為其和也。秋之明潔、不足為其格也。風檣陣馬、不足為其勇也。瓦棺篆鼎、不足為其古也。時花美女、不足為其色也。荒国彫殿、梗莽邱壠、不足為其怨恨悲愁也。鯨吸鰲擲、牛鬼蛇神、不足為其虛荒誕幻也」(『彙解』首卷)と云う。
- (12) なお宋紅霞は、王琦はかつて李白の注釈を作った際に、自分の仕事を「積事忘意」と総括し、その反省を李賀詩注に活かしたのだと指摘する。「積事忘意」とは李白王琦注に対する趙信の跋文に「王琦嘗謂余曰、李善註『文選』、有子邕以統其志。此書(『王琦注])之積事忘意、動有無窮之憾」(『李太白全集』下冊、一六八五頁)とある語。
- (13) 「秦王飲酒」の解釈については、現在も議論が続いている。詳細は森瀬壽三『唐詩新攷』(関西大学出版社、一九九八年)所収「李賀『秦王飲酒』考」「李賀『秦王飲酒』再論」を参照。
- (14) 齋藤响『李賀』(漢詩大系一三、集英社、一九六七年)七〇頁。
- (15) 原田憲雄『李賀歌詩編一』(東洋文庫、平凡社、一九九八年)二〇七頁。
- (16) 奉礼郎も協律郎もいづれも太常寺に属する。
- (17) 実際に、前掲齋藤詠注、原田詠注、及び鈴木虎雄『李長吉歌詩集』(岩波文庫、一九六一年)、さらに葉葱奇『李賀詩集』(人民文学出版社、一九五九年)は、この詩を解釈するに際していづれも「李賀小伝」には触れない。
- (18) 葉葱奇はこの句について、「古詩……、這裏用來說他妻子在家生病、自己無法回去看望」と注する(『李賀詩集』一三頁)。なお齋藤・原田においては、飽くまでも一説として紹介されるのみで、慎重な態度を示しており、鈴木は妻には一切言及しない。
- (19) 前掲拙稿を参照。